

被曝家族の舞台裏

四電 更(日本キリスト教会 上田教会牧師

広島はその頃、異常に緊張していた。その頃というのは、一九四五年(昭和二〇年)上半期の頃である。呉が爆撃され、徳山がやられた。次は間違いない「広島だ」というのである。刻々と危機が迫って来ていることは、子供たちにも感じとれた。家庭でも、学校でも、街中でも、殆んど笑いが無くなっていったのではないか。異常なまでに、はりつめた不安の中にいた。

当時、広島市立大手町国民学校五年生だった私は、弟の招とともに、その六月には学校の集団疎開で、県北、双三郡和田村へ行くことになっていった。荷物も柳行李でチッキ(鉄道旅客の手荷物扱い)にして送り出した。

しかし、なぜか直前になって、私と弟は集団疎開に行かないことになった。荷物も送り返してもらった。しかし、やがて私たちは、今度は「縁故疎開」で疎開することになった。原子爆弾が落とされる二週間ばかり前のことである。疎開先は、同じ双三郡和田村向江田(むこうえた)、土釜熊市方であった。同家には、庄原教会員小林みつきさんが帰っていた。ご主人と子どもさんを亡くして、実家に戻っていたのだった。いわば、小林みつきさんに引き取られたのだ。

父一郎に連れられて双三郡に疎開した私たち兄弟は、一面識もない小林みつきさんの手許で生活することになった。非常事態とはいえ、よくぞ二人の男の児をお引き受け下さった小林みつきさんと土釜さんには、今更のごとく感謝の思いを禁じ得ない。

思うに、集団疎開の行き先が、光行寺(？)、無量寺(？)といっお寺であったために、急遽、父一郎は、同僚の庄原教会の笹尾牧師に相談し、同教会員の小林みつきさんを紹介されたのであろう。

八月六日は、小林みつきさんが、おはぎを持って広島の家を訪ねてくれるというので、私たちは塩町の駅まで、みつきさんを見送りに行った。その時、広島でとんでもない事が起っていること、全滅したことを駅で知らされた。当然、みつきさんの広島行きは中止。私は弟と駅前の片隅で、これでいよいよ、孤児になったこと、今後このままでおれなくなるだろうから、脱走しなければならぬ時が来るだろう、その時は変装して逃げねばならないこと、そのためには、ガラスの破片で眉をそり落として脱走すること、などヒソヒソと囁いたことを覚えている。当時、集団疎開でお寺に住んでいた連中から、「ダツソウ」する話を聞かされていたので、子供心に悲愴な気持ちになっていたのである。

四日後に、よれよれになった一通のものが届けられたが、それは何と、姉佑子からのものであった。自分は生きていること、今は傷を負っているけれど、やがて私たちのところに来て面倒を見るから……、という内容であった。ともかく姉は生きていたことが分かったが、あとの父、母、兄の消息は分からず、孤児になったことの実感が変わらなかつた。しかし、思えば姉は、この時瀕死の重傷であったわけだし、数えて十七歳であったことを思う時、遠くに疎開している弟たちの面倒を母親代りになってみようという健気さに、今も胸が無くなるのである。

当時、爆弾は特殊爆弾とか、空中爆雷といわれ、やがてピカドンと称されるようになって。広島は壊滅し、今後七〇年間は一本の草木も生えない、といわれた。

文字通り壊滅した広島で、全く奇跡的に再会できた四人(父・母・姉・兄)は被爆後五日目に、私と弟のいる双三郡和田村に避難してきたのである。(この辺りの事は、夫々の手に詳しく記載されているので省く。)

矢張り子供である。この日、八月十日、私たちは近所に同様大阪から疎開して来ていた小室加代ちゃん(？)姉妹らと、その家の庭で遊んでいた。(この辺は、弟招の記憶と相違がある。)

八月の田圃は稲が青々としている。その日、その一面青い稲田の向こうから、「コウちゃん、シヨウちゃん！」と呼ぶ声が聞こえるではないか。確かに、あの声は^二四人のものが互いに支えられ合いつつ、ヨロヨロとよろめきながらこちらに来るではないか。上から下まで繻帯に包まれたままである。ほうたいといっても、ほとんどボロボロである。

完全に全滅したと生きていたのに、生きていたのだ、しかも四人とも……。夢では何かワメキながら、弟とともに走って行った。涙がとまらず、泣きながら……。夢で

はないのか?! しっかりと抱き合った。
驚きと歓びとが爆発した。

しかし、ここから新しい苦闘が始まったのだ。

父は連日、憑かれたように熱心に語った。土釜宅の母家で、痛む体を縁側の柱を背に依りかかりながら、父はピカの体験を熱っぽく誇りつづけた。近所の人も来て聞いた。何度も何度も聞いたので、もはや自分自身が見て、体験したかの様に細かい所まで思い浮かべることが出来る。母も誇り、兄も語った。しかし、圧倒的に多かったのは父である。伝道者として、牧師でありつつ未曾有の地獄を体験したのだから、普通の人以上の深い思いがあったに違いない。父はその手記の中で「神に書かれた」と幾度もつぶやいている。人間の罪、高ぶりと偽りに対する神の峻厳な審きを痛感したのだ。

夜眠っている時も、凄まじい叫びで目を覚まされる。毎夜、父も母も兄も恐ろしい夢を見て絶叫するのだ。誰も体験した事のない終末的体験をしたもののみがもつ深刻な苦悩ではなかったか。

一家六人が軒がりこんだ土釜さん宅の御苦労は一方ならぬものがあったに違いない。

数日して、私たち一家は、母家に隣接する二階建の養蚕室に移ることになった。二階の蚕室を片付けて、十畳許りのスペースを作り、間仕切りには幅の広い油紙をたらして部屋を作った。始めは置みはなく、むしろの上「」ザを敷いたものだった。電灯は四〇wの裸電球であった。それでも皆一家揃っていることに不思議な安らぎがあった。重傷の姉は、無論寝たままであったが、苦痛の中でも、微笑みを絶やさなかった。依然として、姉は一家の中の一輪の花でありつづけた。

養蚕場の二階に上り下りする階段は、一番奥であった。熊市老が簡単な炊事場を二階に取り付けてくれた。高さ七〇センチほどの水がめが置かれた。当時、井戸は母屋の反対側にあった。二階の水まに水を運ぶのは私の仕事であった。井戸端まで汲みに行くと、母家の庭を横切り、養蚕場の一階をつき切り、薄暗い階段を一段一段バケツを運び上げるのは仲々の重労働であった。十一歳の少年にはまだ手に余る仕事だったが、弱音を上げなかった。私も必死だったのである。私だけが元氣だったからだ。井戸端で野菜などを洗って二階にもって上がり、調理するのも私の仕事だった。最も苦労したのは、洗濯である。傷を負った着たちの汚れた繻帯（実はポロ布）は、血と膿にまみれ、井戸端で洗うことは憚られた。二百メートルも離れていただろうか、馬洗川（ばせんがわ）まで行って洗うのである。調子の良い時は母も一緒に行った。私が洗濯物を借りた金盤に入れて持って行くのである。土堤に上って、水ぎわまで母の手を取って降ろすのも私の役目であった。川への行き帰り、母はよく口ずさんだ、「まほろしのかげをおいて……」（讚美歌五一〇）。この歌の折り返しは、「母は涙乾くまなく祈ると知らずや」である。

後年、東京の病院で死ぬ直前の母を見舞いに行った時のこと、枕許でこの讚美歌を歌い、「馬洗川に行って洗濯した時よく歌いましたね」と言うと、母は「よく覚えていてくれたねえ」と言って遠くを見る目をした。

九月に入って秋の虫が鳴き始める頃、姉佑子は、一切の苦痛から解放されて天に召された。それは文字通り、主イエス・キリストの御手に委ねて、天のふるさとへ帰って行ったとしかいい様のない厳粛にして、荘厳な最後であった。この辺りの事も、父の手記に詳しい。そして、この出来事が、その後遺された三人の弟たちの人生に決定的とも言える大きな影響を与えることになる。

私たちは毎日のように聖書を読み、讚美歌を歌い、祈った。また、そうせずにおれなかった、といってもよい。父は手許に黒革の聖書を持っていた。縁のすり切れた見憶えのある聖書である。原爆の時も肌身はなさず持っていたのであろうか。私たちも疎開の時、持たされていたので、避難先で一家で読み歌う時困ることはなかった。姉の最後の時とヨハネの黙示録の記事が重なって記憶されているので、父は姉の臨終の時、黙示録を静かに朗読していたのではないか。父が出かけることが出来るようになって、広島へ出かけては、教会員のあの人、この人を訪ねていたようであるが、記憶ははっきりしない。

姉が死んでから、父がその遺体を焼いた火葬場の方に向ってしばしば立ちすくんでいるのを見た。横顔を見ると涙が次から次へと流れていて、不思議な感じがしたものだ。父が泣いているのを見たのは初めてだったからである。彼は三日間泣いた。

毎日のように行われた家庭礼拝においてだったか、主日礼拝であったか記憶が定かではないが、「大いなるバヒロンは滅びた」とか、「死に至るまで忠実なれ」のヨハネ黙示録の言葉や、語調の良さもあって憶えてしまった。「シャテラク、メシヤク、アベテネゴの神、メネ、メネ、テケル、ウパルシン」のダニエル書の言葉を、当時憶えたという事は、父がそれらの書を用いて語っていたのかも知れない。

母はおおむね沈黙していたが、その祈りは子供心にも、きわめて敬虔で、沈痛なるものであった。驚天動地の経験をし、独り娘を無残にも原爆で喪った母としては、伝道者の妻として、主に「何故に……」と問わずにはおれなかったのだと思う。古びたワラ版紙に沢山の短歌を書きつづっていた。毎日毎日、呻くような魂の叫びを主に向ってつづっていたように思う。父が私の持っていた絵の具を借りて、姉佑子の遺影を、実に丹念に画いた絵とともに今は残っていないことが残念でならない。

それでも母は死の直前「神さまのなされる」とは何一つ間違いがなかったよ」と言った。すでに牧師になっている息子は、自分の信仰と段違いに高いところにいる母の信仰に今更の如く教えられたものだ。

姉が死んだ年（一九四五年）のクリスマスは、何処となく悲痛な気配が漂っていた。敗戦、水害等も重なったからだ。

しかし、当日は土釜家、四竈家の他に、矢張り疎開して来た小林みつきさんの妹さん一家も加わった。塩町で呉服店を経営（？）していた庄原教会の西上さんや近所の人も一、二加わって行われた。祝会の中で、瀬戸晴美ちゃん（？）が「太郎は父のふるさとへ、花子は母のふるさとへ……」まで歌って、ワッーと泣き出したので、よく憶えている。

私たちの不自由な生活を見かねて、土釜熊市氏は、二階の階段をつけかえてくれた。彼は当時七〇歳近くであつたらうか。その名の如く熊のようにのっそりとし、農作業によって鍛えられた節くれだった手、足と陽に焼けた顔に炯炯たる眼に威力があつた。当時の農夫は、大工仕事でも土木工事でも何でも出来た。階段も単なる梯子ではなく本格的な階段であつた。彼は、この他、牛小屋と廁の間に手造りの風呂場まで作つた。黙々として仕事をすると驚くべき立派なものが次々と造られて行くのであつた。

私は、彼が作業をするに当って、悠々と鉋を研いだり、鋸の目立てをしたりするのを飽かず眺めていたものだ。言葉少なに彼は、私にコソコソ教えてくれた。私は彼によって実に多くのことを学んだと思う。いまだに私は藁草履の作り方を覚えてる。

余程便利になつた二階への上り口のところに、私は「竈（かまど）」を作つた。一家のためにはわたしは週に三、四度はたきぎを拾いに行かねばならなかつた。山へ行つて、落ちてくる枯枝を集め、束にして背負子（しよいこ）にかつぎ、松葉など燃えやすい枯葉とともに採ってくるのである。文字通り「山へ柴刈りに、川へ洗濯へ」の日々であつた。それゆえいまだに、荷造りや飯炊き、火の燃やし方など、他人がやる時はつい、口出しをしようほど下手を見ておれないのである。

ピカでやられた者には、新鮮な野菜、特に色のついたもの（たとえばトマト、ニンジンなど）が良いときいて、家族のために、取り残された真赤なトマトを一つ無断で採つてきたことがある。誰にも見つからないと思つていたのに、見ている人が居、さらにその人が具合が悪くてふせつている母親のところに密告をするに及んで、私は母をひどく嘆かせたのである。「お母さんはつらかつたよ」と。ここでも「牧師の子のくせに」はついて廻つたのだ。「ザに額をつけて謝つたことは、長く口に出せない屈辱として私の中に残つた。その他、空腹のあまり、母屋でつくるおはぎに手を出したこと、私の中に罪意識をおぼえさせたのもこの頃であつた。

村人から、二坪許りの土地を借りて、野菜作りをはじめようになつた。これも、新鮮な野菜が原爆症に良いと聞いたからであつた。

主に母と二人で畑へ行くのだが、肥桶（こえたご）は私がかつぐのである。桶に半分位しか入れないのだが、極めて重い。しかも、天秤で運ぶのだが、これが仲々難しい。ピチャピチャはねるのを両手でシツカリもち、腰を上手につかつて、ヒョイヒョイとこぼさなように運ぶのである。今は貴重な体験だつたと思う。

父・母・姉・兄いずれも、髪の毛が抜け、紫斑が出、歯ぐきから出血する、いわゆる典型的な原爆症が出た。姉の死後、どうしても専門の病院に行かねばならない、という事になり、庄原の日赤へ行くことになつた。付添が私だつた。旅費はどうしたのか、今もつて

分からない。

昨年十一月（二〇〇三年）、私は高校卒業五〇周年という事で、会場は庄原の郵貯会館であった。すっかり変わった庄原の町に、かつての面影を見出すことはできなかった。しかし、途中、「国兼川（くにかねかわ）」のほとりを通り、疎開当時通っていた和田国民学校下を通りかかった時、思わずマイクロバスを止めてもらって、懐かしい学校を見て来た。

すっかり変わっていたが、少しは古い校門などに面影を見出すことが出来た。

物悲しさに胸を塞がれながら通った土手の道など、いささかの感傷旅行（センチメンタルジャーニー）であった。

ともあれ、当時のピカの被爆者一家の悲惨な体験とともに、それを懸命に支えてくれた人々がいたことを忘れてはならない。土釜さん一家、小林みつきさん、笹尾牧師らの愛を今更の如くに思う。

そして当時十一歳の少年がヒバク一家を迎えて、目の廻るような時流に翻弄されながら警固した舞台裏の実情はそうだったこと、そしてその中でごまかされ得ない、したたかな眼で見るべきものを見てきた事、すべてにわたって「神のなし給う事は、何一つ間違いはない」といった母の言葉を折りにふれ思い起こすのである。

なお、四電 更先生は（二〇〇四年十月二二日七〇歳で神様のもとに行かれました。）